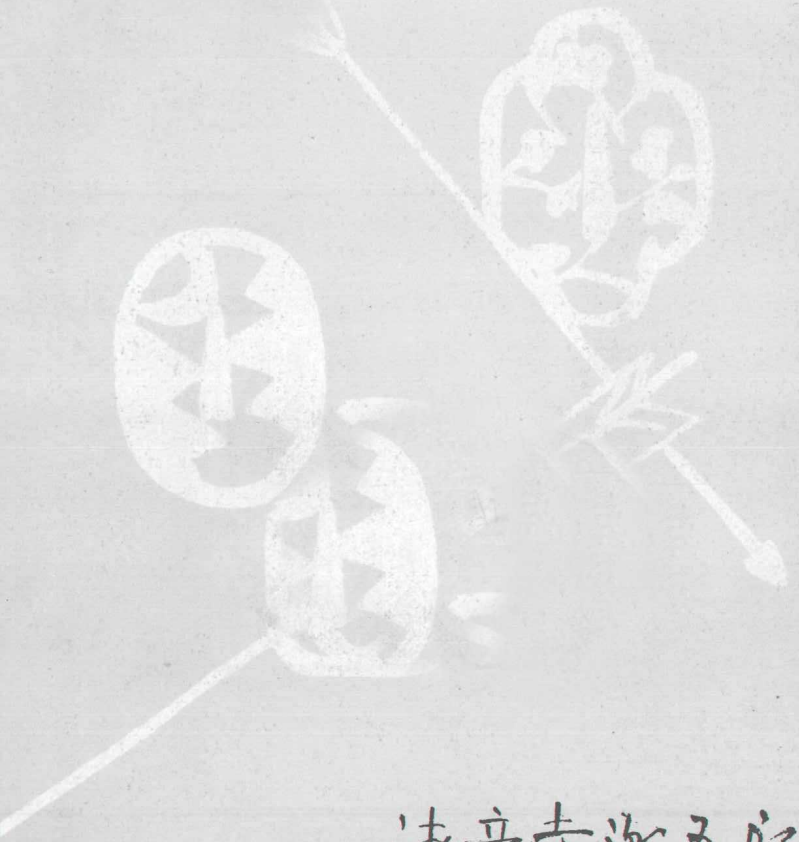
武將列傳

海音寺潮五郎

武将列傳



海音寺潮五郎

文藝春秋新社

武將列傳

昭和三十四年七月二十日 初版
昭和三十六年五月三十日 六版

定價 二八〇圓

著者 海音寺潮五郎
發行者 車谷弘
印刷者 柳川太郎

發行所 文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替 東京 七八七四三

© 1959 CYŌGORŌ KAIONJI

本文 凸版印刷
函他 大日本印刷
製本 矢嶋製本

萬一、亂丁、落丁の節は、書店または本社でお取換えします。

目次

惡源太義平　五
黑田如水　五七
伊達政宗　一一五
足利尊氏　一七一
齋藤道三　二二一
大友宗麟　二六一

裝幀　杉本健吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

武將列傳

惡源太義平

一

「父は源義朝、母は三浦ノ大助義明の女、永治元年(一一四一)、坂東で生まれた。この時義朝の年十九。」

義平の誕生について確實にわかつていることは以上につきる。

義朝の館が鎌倉の龜ガ谷にあつたことは、東鑑の治承四年十月七日の條に、頼朝がはじめて鎌倉に入つた時、亡父の舊跡をここに弔らつたという記述があるからはつきりしている。多分義平の誕生當時も義朝はここにいたろうと思われるのだが、義平の生誕地がここかどうかはわからない。當時の公卿や豪族等は一夫多妻で、その妻のあるものは迎えられて夫の家にいることもあるが、大抵はそれぞれの實家にいる習慣であつたからである。だから、義平は鎌倉の龜ガ谷の父の館か、三浦半島の久里濱に近い衣笠城のいずれかで生まれたようだとしか言えない。

生まれて何年かの後には龜ガ谷の館に住いするようになつたらしいが、父と一緒に暮らす期間はそ

うなかつたようである。義朝は鎌倉を本據にしてはいたが、たえず京都に往來していたようであるからである。それは義平の弟妹等の母が、京都または鎌倉と京都との間の道筋の女であることを以て推察がつくのである。次弟朝長の母は相模秦野の波多野義通の妹、次の賴朝の母は熱田の大宮司藤原季範の女、次の希義の母は駿河香貫の藤原友忠の女、次の範賴の母は遠江池田の遊女、次の今若、乙若、牛若の三人の母は京の常磐であり、ほかに夜叉という妹があるが、これは美濃の青墓の遊女延壽の所生だ。義朝はしげしげと京に往來したにちがいないのである。

だから、義平の武人としての教育には、坂東諸國に土着している源氏累代の家人、なかんずく三浦一族があたつたと思われる。

ここで、當時の武士というものについて、ちよつと說明をしておく必要があるようだ。

當時の武士は、武士という名は同じでも、戰國時代以降の武士とはちがつて、專門軍人ではない。本質は在地の地主である。王朝時代の初期に京都朝廷は經濟的の理由から常備軍を撤廢した。何十年に一度使うか使わないかわからない常備軍を持つていることは不經濟きわまるという理由だ。ところが、軍備は一面からいえば警察力でもある。常備軍の廢止によつて、日本の警察力はガタ落ちになつた。微弱な盜賊の追捕は檢非違使のはたらきでも出來たが、强力な集團的盜賊にたいしては全然無力だ。

當然のこととして、人々は自らの力を以て自らの生命と財產をまもらなければならなくなつた。地方在住の地主等は一族や領內の農民等を部署して家ノ子郎黨として、自ら武力を持つようになつた。これが武士の起原だ。だからこの時代の武士とは後世のように職業や身分をあらわすことばではなく、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

單に武力を持つている在地地主とその家ノ子郎黨の別名であつた。このことはずつと後までつづいて、戰國初期までは大體この通りであつた。戰國に入つて、明けても暮れても戰爭しなければならなくなつたから、兵と農とが分離して、武士の職分は戰爭專門となり、武力はまた權力でもあるので四民の最上位に位することにもなつたのだ。

ついでに言う。寺院が僧兵を養つたのも、神社が神人を養つたのも、同じ理由からで、その發生は武士の發生と同じ時代である。

さて、武士はこのような社會的條件によつて發生したのであるから、その發生は全國ほとんど同時で、どこが先きということはなかつたのだが、それでも、坂東はその本場とされた。それは、坂東が日本の邊境地帶であつたからである。

日本の國境線は、奈良朝の末期から平安朝の冒頭(ぼうとう)までの間に、一應今の岩手縣の中部あたりまでのびはしたが、それでも實質的には白河ノ關から北は蝦夷(えぞ)人の天地であつた。この地方が完全に日本の領土となり同化したのは、鎌倉時代の初期に源頼朝が蝦夷人の王であつた平泉の藤原氏をほろぼしてからである。つまり、この以前の奥羽地方は一頃の滿洲のようなものであつたと考えてよいと思う。

坂東地方はこの奥羽地方と境を接しているのだ。そこにあるものはたえざる戰鬪狀態だ。混血もあり、同化もあつたにちがいないが、摩擦と鬪爭が不斷にくりかえされ、今日われわれが西部劇映畫で見るような狀態がいく百年もつづいたのだ。似た條件の下には似た結果が生ずる。西部開拓の時代の西部の住民から生命知らずの勇敢な人物が多數あらわれ、拳銃の名人が輩出し、男をみがく氣風が生じたように、當時の坂東にも驍勇(ぎょうゆう)果敢で、くつきような荒馬乘りの射術の妙手や、打物(うちもの)わざの名人が

續出し、男性的氣概を無上のものとする武者氣質が生じた。

また、當時の奥羽には、しばしば大規模な叛亂がおこり、その度に中央政府では征討將軍を派遣しているが、前に言つた通り、常備軍がないのであるから、任命された將軍は坂東に來て、ここで兵員を徴募して征討軍を編成して奥羽に向うのが例になつていた。このことも、坂東人を鍛えた。

このようにして、坂東人は勇敢になり、强健になり、最も理想的な戰士となり、ついに坂東は武士の本場とされ、八州の兵を以て天下の兵にあたるべしといわれるほどになつたのである。

義平は、この坂東武士等に訓育されたのである。どんな人物になつたか、それは間もなくあらわれた。

二

久壽二年（一一五五）に義平は十五になつたが、その年八月十六日、叔父義賢（木曾義仲の父）と戰つて、これを攻め殺している。

義賢は義朝のすぐ次の弟である。年は——義朝の年がこの時三十三であるから、一二歲下であつたろうか。彼等の父の爲義は子福者で、六十一で死ぬまでの間に男女二十二人の子があつたというから、あまりへだたつては間に合うまい。

義賢は若い頃近衞天皇がまだ東宮であつた頃、東宮につかえて帶刀の長となつたところから、帶刀先生と世間から呼ばれていた。帶刀というのは帶刀舍人の略稱で、東宮護衞の兵士である。身分よく

また武勇すぐれた者を任ずることになつていた。その長に任ぜられたのであるから、義賢が武勇の士であつたことは明らかだ。彼は父爲義から上野國大胡に田莊をもらつてここにいたが、その後、武藏秩父の住人二郎太夫重隆（畠山重忠の大叔父）の女をめとつて、常に秩父に往來しているうちに、やがて武藏國比企郡大藏鄕に移り、ここに館をいとなんで住んだ。

この館のあとは埼玉縣比企郡菅谷村大字大藏に現存して、東西約八十五間、南北約百五間の廣さがあり、東、西、南の三面に土壘や堀のあとをのこし、往々古い布目瓦を拾うことが出來るという。この館址の東方約三十間の位置に、義賢の墓といわれている五輪の石塔がある。

さて、親しかるべき叔父甥の間にどうして爭いがおこつたか、一切不明である。

最も常識的な推察をすれば、所領の爭いであろう。これはいつの時代でも最も多い血族の爭いの原因になり得る。平將門の同族との爭鬪も、その根本原因はそれであると考えられている。

あるいは、家來同士の爭いがもとかも知れない。これも當時の武士にはよくあつたことだ。

今昔物語にある源ノ宛と平ノ忠文の合戰の原因がそれである。この二人はともに武藏の國の住人で、源ノ宛は今の埼玉縣鴻ノ巢の近くに地名ののこつている箕田に居住して、二男であつたところから箕田ノ源二といわれ、忠文は今の熊谷市の南方に地名ののこつている村岡に居住し、五男であつたので村岡ノ五郎と呼ばれ、共に勇武の名が高かつたが、武勇尊重の土地の空氣である、家來共はそれぞれ、

「おらが殿の方が強いわい」

「うんにや、おらが殿が強いわい。おらが殿にくらべれば、汝が殿なんぞ小指にもあたらんぞい」

と自慢し合つて爭い、ついには主人同士の仲まで惡くなり、双方談判して、日をきめて兵をひきい

て野に出て雌雄を決することになつた。
約束の日、二人はそれぞれに五六百の兵をひきつれて定めの野に出て合戰に及んだが、その間際、村岡ノ五郎が、
「この合戰の原因は、どちらの武勇がすぐれているかどうかの口論から起こつたことである故、われら大將同士が一騎討ちして優劣を決すれば、それですむのである。郎黨共まで戰さに卷きこむ必要はないではないか」
と發議した。
「それはそうだ。それではそういたそう」
箕田ノ源二も同意し、それぞれ郎黨等に手出しを禁じ、双方馬を乘りちがえ乘りちがえ、互いにすきをねらつて箭を射放つたが、互いに巧みにかわしたので、勝負決せず、ついに、
「われら双方共に射る箭は決してはずるべき箭ではないのに、お互いに見事にかわし合つた。優劣なしと見るべきである。もともと深い怨恨のあるなかではないのだから、これでやめようではないか」
とて、仲直りして、以後は隔心なく親しみ合つたというのである。
古事談にはまたこんな話を傳えている。源頼義が京の邸で佛事を營んでいる席へ、頼義の長男八幡太郎義家の郎黨が入つて來て、源頼光の孫で義家にはふたいとこにあたる美濃七郎源國房が、義家の郎黨に恥辱をあたえたということを、義家に耳うちした。義家は忽ち激怒の形相になつて席を立去つた。頼義は自分の家來に、「太郎が樣子まことにいぶかしい。何をしているか、見てまいれ」と命じた。

家來は義家の宿所に行つて樣子を見て、かえつて報告した。
「義家の殿は物の具を召し、庭にお馬を引かせ、鞍をおかせられ、今にも打ち立ち給わんずる御樣子であります」
「さもあろう。髮を逆立て、おそろしい形相であつたわ。汝はもう一度行つて、わしが、何事がおこつたかは知らぬが、この佛事がおわつてからにいたすよう、あと一兩日ですむことであるからと申したと、かように言え。聞き入れぬようであつたら、門に鍵をかけ、その方は塀を越えてかえつてまいれ」
家來は再び義家の宿所に行き、賴義のことばを傳え、言いつけられた通り、門に鍵をおろし、塀をこえてかえつて來た。
義家は口上を聞き流しにして出發しようとしたが、家來が門に鍵がかけてあると告げた。
「みずきであけい」
みずきというのは轡の一部で、手綱を結びつける部分だ。鍵のかわりになるのだ。
こうして門をあけて外へ出、從騎わずかに三騎、逢坂山に達した時、やつと十五騎となり、美濃についた時二十五騎となり、いきなり國房の館に火をかけて襲擊した。
この時、國房は紅染めのふだん着姿で、烏帽子もかぶらず、拳に鷹をすえてあやしていたが、不意を打たれて、いのちからがら、鷹を拳にすえたまま裏山に逃げ去つた。
「お逃げになつた先きを見ています。追いかけて行つて討取りましよう」
と、義家の郎黨等は言つたが、義家は、

「いや、いや、これで怨みは晴れた。ここまでこらしめれば十分」

と言つて引き上げたとある。

家來の喧嘩を主人が買つて出るのは、當時の武人には決してめずらしいことではなかつたのである。それは當時の武士の主從關係から來る。

當時の武士の主從關係は後世の主從とはちがつて、主人が家來に財物給付をすることによつては成り立つていなかつた。だから家來の主人にたいする忠誠もその財物給付にたいする反對給付ではなかつた。もちろん、そんな家來も全然ないわけではなかつた。主人の家に住みこみで奉公している者もあれば、主人の田莊の一部の管理をまかせられている者もあつて、これらはもちろん財物給付を受けているわけだが、前者は奴隷といつてもいいくらいひくい身分の者であり、後者はごくかぎられた數であつた。大多數の者は自分の所領をもち、それによつて生活していた。それでありながらなぜ主人を持つたかといえば、主人によつて生命、財産、名譽を保護してもらうためであつた。

だから、主人たる者は常に家來にひいきして、善惡共にかばい通す心意氣と强さがなければ頼もしい主人とは言われず、家來共もまたそんな主人でなければ身命をなげうつてつくす心になれなかつたのだ。この主從の義理は後世整備美化されて「武士道」と呼ばれるようになつたのだが、そのはじめにおいてはこのようなもので、つまりはほぼ後世の博徒の親分子分の心意氣に似たものにすぎなかつた。

第三には、家來の爭奪が原因かも知れない。長門本盛衰記によると、義賢のことをこう書いてある。

「義賢去る仁平三年夏の比、上野國多（大）胡郡に居住したりけるが、秩父次郎太夫重隆が養君にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook